

特定研究集会（課題番号：2019C-02）

集会名：第 10 回総合防災に関する国際会議

研究代表者：横松 宗太

開催日：令和元年 10 月 16 日 ～ 10 月 18 日

開催場所：Centre Universitaire Mediterranee (CUM), 65 Promenade des Anglais, 06000 Nice, France（フランス・ニース）

参加者数：240 名（所外 186 名，所内 54 名）

・大学院生の参加状況：6 名（修士 1 名，博士 5 名）（内数）

・大学院生の参加形態 [研究発表]

研究及び教育への波及効果について

本年度は「知識を基盤とした災害リスクマネジメント：持続可能でレジリエントな都市と組織のための“スマートな領域”によって活動範囲を拡げる(Knowledge-based Disaster Risk Management: Broadening the scope by “Smart Territories” for Sustainable and Resilient Cities and Organizations)」をテーマとし、前年会議（オーストラリア開催）のテーマ「総合的災害管理のためのデータが駆動するアプローチ(Data Driven Approaches to Integrated Disaster Management)」をさらに深く多角的に議論した。「知識を基盤とした防災」を、学会が一貫して取り組む「総合化」や、「スマート」「持続可能」「レジリエンス」の視点から集中的に議論した。世界の一流の防災研究者や実務者達が、複雑化する災害に対して、いかに量的・質的データや経験知をストックし、実践の現場にて適切に利用していくべきかを討議したことは、総合防災の分野の発展にとって極めて有意義であったと考えられる。また、恒例の若手研究者セッションでは、博士課程学生たちが口頭発表セッションと、討議セッションの二通りの形式で発表と議論を行い、シニアの研究者から熱心なコメントや指導を受けた。優秀な発表への表彰も行われ、学生達は今後の研究活動に向けてさらに意欲を高めていた。

研究集会報告

(1)目的

国際総合防災学会は岡田憲夫教授（当時の本所の教授，現在は名誉教授）を会長，多々納裕一教授を副会長として 2010 年に設立された。2019 年現在も防災研究所より，多々納裕一教授（副会長），アナマリア・クルーズ教授（書記），畑山満則教授，横松宗太准教授（会計）の 4 人の理事を輩出している。

学会は毎年国際会議を開催し，2019 年の今回は第 10 回の会議となる。近年は約 20 カ国から 200 人を超える数の研究者や実務者，博士課程学生らが集い，災害のリスクガバナンスの構築のための学際的・分野横断的な議論を行っている。世界に総合防災のネットワークを拡張することを目的として，開催地を毎回移して，現地から多くの新しい参加者を得ている。

今回は初めてのフランスでの開催となる。そしてテーマは，前年度の会議でフォーカスした災害データのマネジメントを，情報から知識へ，そして実践への適用や，さらには長期的な持続可能性にまで広げたものとなった。一貫して総合防災のあり方を議論してきた本学会にとって，極めて重要な回となった。

恒例の若手研究者セッションには，毎年，防災研から多くの大学院学生が参加して，国際的な研究者を目指す足がかりとして貴重な機会となっている。また同学会には国際応用システム分析研究所(IIASA)など，GADRI に参画している機関も多く，それらとの連携が強化されることも期待される。

(2)成果のまとめ

今回は「知識を基盤とした災害リスクマネジメント：持続可能でレジリエントな都市と組織のための“スマートな領域”によって活動範囲を拡げる(Knowledge-based Disaster Risk Management: Broadening the scope by “Smart Territories” for Sustainable and Resilient Cities and Organizations)」をテーマとした。基調円卓討論と基調講演の講演者とタイトルを以下に記す。

< 基調円卓討論 >

Claire-Anne Reix 氏， Andrew Bower 氏， Philippe Quevauviller 氏（討論タイトルは会議テーマと同一）

< 基調講演 >

1. Ana Luiza Massot Thompson-Flores 博士「災害リスクの軽減：科学と文化のためのスマートでグローバルな問

題 (Disaster risk reduction, a smart and global issue for science and culture)」

2. Charles Baubion 博士「クリティカル・インフラストラクチャーの強靱化のためのガバナンスモデル, OECD のアプローチ (Governance models for critical infrastructure resilience, an OECD approach)」
3. Joanne Linnerooth-Bayer 博士「損失と被害への対応としての保険なのか? (Insurance as a response to loss and damage?)」
4. 渥美公秀教授「日本の災害ボランティアの四半世紀 (A quarter of a century of disaster volunteers in Japan)」
5. 矢守克也教授「津波避難訓練の新しいツールを用いた社会実践と発展過程の学際的研究 (An interdisciplinary research on the development and social implementation of a new tool for tsunami evacuation drill)」
6. Shuaib Lwasa 教授「アフリカの都市における, 土地利用ダイナミックスの都市エコロジーの登場 (Emerging urban ecologies of land use dynamics for resilience building in cities of Africa)」

また, 28 個の口頭発表セッション, 6 個の円卓討論セッション, 3 個の相互討論セッション, そして博士課程学生を対象とした若手研究者セッションが行われた。本会議の議論の成果を素に IDRiM Journal に特集号を企画している。2010 年の学会創設以来, 毎年開催してきた本国際会議は今回で 10 回目となる。これまでの取り組みによって, 総合防災(Integrated Disaster Risk Management, IDRiM)のコンセプトや重要性への認知や理解は着実に向上している。来年の会議では, 学会が発足した京都において, 過去 10 年に亘る総合防災の議論をとりまとめ, 新たな 10 年のロードマップを描くことが予定されている。

(3)プログラム

<https://idrim2019.com/wordpress/wp-content/uploads/2019/10/FINAL-PROGRAMME-IDRIM-2019.pdf>

(4)研究成果の公表

<http://idrimjournal.com/>

<http://idrim.org/>

<https://idrim2019.com/>